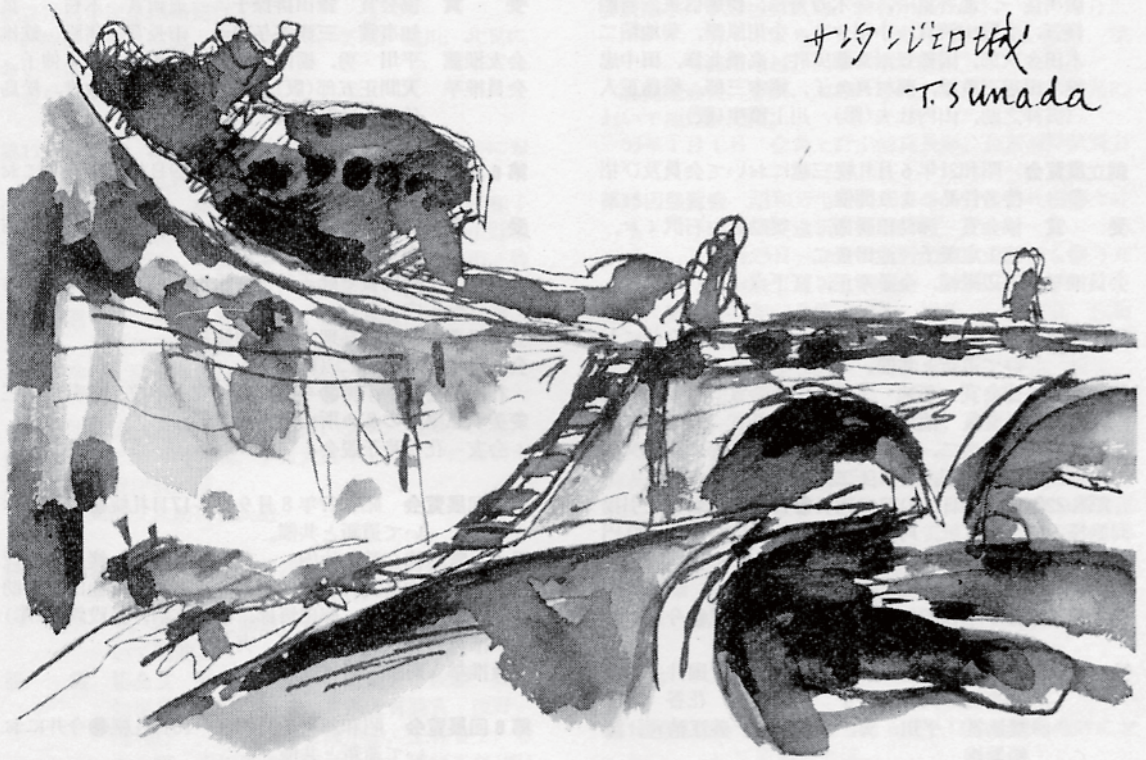


# ヴァン・アイク詣で

砂 田 友 治



サウジビロ城  
Tsunada

ジェントの駅に降り立つ、5時頃か。これからが大活劇。つまり、実力でパボン寺を捜し出し、その附近に安宿を見つける作業である。これは省略。

翌朝、目的の絵に向って、早々に飛び出す。あけてくれない。東洋の日本からきたんだぞお！ と奴鳴る。10時すぎて、やっとあく。小さな部屋だ。

ああこれが有名な絵か。神秘の小羊。とにかく見る。そして見る。この絵一枚のために、ここまで来たのだと。そして、正しくレアルの心髄というものだ。油えのぐを削り出した男の絵とは、こういうものか。そこに、生きた人間がそっくりあるのではないか。

ところが、それは完全なる絵である。これでは論理がなり立たない。並みいるたくさんのレアル絵画と、明瞭

な異い。だが、それがなんであるか、わからない。

精緻微妙な実在感に、ボルゲーゼのラファイエルの肖像を思い出す。ここを先途と見つけた。だが、あまり見れない。人替り扉は、幾度も閉じられた。見ると、私一人だ。坊さんが妙な眼をむける。

昼頃出る。きてよかった。大変な相手だ。つくづくとアイクの偉大さを考えた。この大きな寺も、ジェントという都市も、この絵一枚でもっているのではないだろうか。

私は、最高にして唯一のものを見た。一人夢に耽っているうちに、カメラを忘れてしまった。この感銘の前には、それも小さなことであった。